

まねきねこ

ヘルスケア関連団体のネットワークを支援する情報誌

2025

Vol.

66

四方を海に囲まれ
山川に恵まれた日本では
古くから各地に
さまざまな橋が架けられ
暮らしや産業を支え
人と人をつなげてきました
時を経た今
気候変動による
水環境への影響も
懸念されています
どうか、美しい橋々の情景が
これからも続きますよう

長崎県
眼鏡橋

東京都
日本橋

山口県
錦帯橋

日本三名橋

長崎 山口 東京

1・2

対 談

第3回

PPI(患者・市民参画)パネルも始動
今後のヘルスケア関連団体に期待される役割としてのPPI
北村 篤嗣 ファイザーR&D合同会社/R&D Head Club
奥田 伊奈葉 グラクソ・スミスクライン株式会社/R&D Head Club

3・4

Focus on フォーカスオン 第18回

研究者や企業に働きかけて治療薬開発を実現
車いすユーザーのためのアプリも開発し、社会貢献を目指す
NPO法人PADM 代表/認定NPO法人ウィーログ 代表理事 織田 友理子

5・6

活動紹介 ヘルスケア関連団体ネットワーキングの会 VHO^{net}

第55回 関東学習会 第36回 北陸学習会
第46回 東北学習会 第47回 沖縄学習会

ヘルスケア仕事探訪

精神保健福祉士

第5回

患者さんを考える

MEDICAL INFORMATION

「知りたい情報」は何かを考え、日々進化する情報サイト

Report the

ファイザープログラム

助成対象プロジェクトのご紹介

一般社団法人 OHANA
認定NPO法人 FaSoLabo京都

代表理事 赤松 未来
理事 小谷 智恵

患者の力

第22回

人類にとってのケアの姿とは

慶應義塾大学 名誉教授 加藤 眞三

デジタル配信への切り替えのお知らせ/書籍・イベントのご案内

7

8

9・10

11・12

13・14

対 第3回 談

PPPI（患者・市民参画）パネルも始動 今後のヘルスケア関連団体に 期待される役割としてのPPPI

ヘルスケア関連団体の皆さんに広く知ってほしい取り組みや伝えていきたいテーマについて話し合っていたく対談企画。今回は当事者との協働を目指す「R&D Head Club」(以下、R&Dヘッドクラブ)のメンバーに、医薬品開発における課題やヘルスケア関連団体への期待を語っていただきました。



製薬企業の立場から
患者との協働に
取り組む

奥田 伊奈葉 さん
グラクソ・スミスクライン株式会社
R&D Head Club



早くからPPPIの推進に注力
VHO-netにも
ボランティア参加

北村 篤嗣 さん
ファイザーR&D合同会社
R&D Head Club



聞き手

ファイザー株式会社
コミュニティ・リレーション部
VHO-net 監事
喜島 智香子 さん



日本初のPPPIパネルを作成

2025年4月、R&DヘッドクラブとVHO-net※1はPPPI※2（患者・市民参画）促進に

関するパートナーシップ契約を締結し、今後、日本初のPPPIパネル(当事者登録制)の作成を予定しています。まず、R&Dヘッドクラブについて教えてください。

北村さん 2005年に日本の製薬企業の研究開発部門長を中心に構成された任意団体です。新薬開発・承認にかかわる問題点を討議し、日本の規制当局、政策決定者、医療従事者、アカデミア、患者団体などの議論を通じて、製薬企業の開発プロフェッショナルとしての大胆な提言を行い、グローバルな革新的医薬品の開発に寄与することを目指しています。最近では、治験のさらなる効率化エコシステム)にR&Dヘッドクラブの提案が多く採用され、治験の同意説明文書(ICF※3)を共通化する「ICF共通テンプレート」の提案や推進にもかかわらず、日本の医薬品開発について重要な役割を果たしています。

PPPIパネルの作成の背景として、どのような課題があるのでしょうか。

北村さん まず、患者さんや市民の方には、治験自体があまり知られていないこと、PPPIに参加する方が限られているという課題があります。また、海外、特に欧米で開発・承認された薬剤に対して、日本での承認に時差が生じるドラッグラグ、日本で承認されないドラッグロスの問題があります。その理由としては、近年、開発される薬剤の過半数がバイオベンチャー企業によつて生み出されていることがあります。最も大きな市場である米国で承認される薬剤が圧倒的に多く、ヨーロッパも米国とヨーロッパではドラッグロスはあまり生じていません。ところが、小規模なバイオベンチャー企業は、これまで特有の規制があり、英語圏ではない日本での治験などの対応が遅れがちなのです。

奥田さん 小児での治験が特に進めにくいというのも課題だと思います。また、特定の細胞やがん種をターゲットにするような薬剤が増えたことで、小規模のバイオベンチャー企業の方が研究者などと連携しやすく、スピーディに医薬

※1 VHO-net: (一社)ヘルスケア関連団体ネットワークの会

※2 PPI: Patient & Public Involvement

※3 ICF: Informed Consent Form

R&D Head Club

2005年設立。日本の製薬企業の研究開発部門長を中心に23社により構成される(2025年9月現在)。

<https://rdhead-club.com/>



品開発ができるという背景もあると思います。ただし、保険の仕組みが日本とは異なるため、米国だけでなく、欧州各国でも承認されている薬剤が使えない場合があることは認識しておく必要があると思います。

PPⅠが広がることへの期待

欧米ではPPⅠが進んでいるようですが、そもそも、なぜ、医薬品開発にPPⅠが重要なのでしょうか。

北村さん 最終的な医薬品のユーザーである患者さんの声を聞き、要望に応えていくことは当然の流れです。医薬品開発に患者さんの声を取り入れるということに関しては米国よりヨーロッパの方が進んでおり、患者団体、大学、非営利団体、製薬企業が参加した「全欧州革新的

医薬品イニシアティブ(IMI)^{※4}プロジェクト」の二つに、欧州患者アカデミー(EUPATI)^{※5}という医薬品の研究開発に関する患者さんの知識向上を目指した教育機関があります。ヨーロッパでは文化的にダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DE&I)^{※6}という考え方が浸透しており、医薬品や医療の受益者である患者さんの声が重要であると認識されているようです。

奥田さん 規制当局である欧州医薬品庁(EMA)^{※7}の場合も、患者さんで構成される委員会が設けられており、製薬企業が規制当局に薬剤の開発を相談する段階や、開発後の承認申請時、販売後の安全性のレビュー期間などの各段階で、当局の審査官と同じタイミングで患者さんの視点でチェックする仕組みが整っています。

VHOnetでもPPⅠに参加するための研修を計画していますが、当事者の皆さんにとっては、PPⅠに取り組むことで、どのようなメリットがあるのでしょうか。

北村さん 長期的には、PPⅠが推進されることによって臨床試験や治験の課題が解決されることで開発がスムーズに進み、新薬を日本の患者さんも速やかに使用できるようになると考えられます。患者さん個人にとっては医薬品開発について理解を深めることでヘルスリテラシーが高まり、ご自分のQOLが改善されるケースもあるのではないかと思います。

奥田さん PPⅠに参加することで視野が広がり、海外の患者団体などにつながることもでき、より早く情報収集ができるという面もあると思います。PPⅠを通じて、医薬品開発のパートナーとして協働している、医療の発展に貢献しているという思いを、少しでも感じていただけることができれば、私たちとしてもうれしく思います。

AIによる翻訳などを活用すれば海外との言葉の障壁は解消されていくと思いますし、患者さんにとっても、PPⅠに参加する意義はある

ということですね。最後に、VHOnetやPPⅠパネルへの期待を聞かせてください。

北村さん VHOnetには多様な団体のリーダーの方が参加されているので、R&Dヘッドクラブとしては、PPⅠパネルを通じてPPⅠに協力される方が増えることで、お互いにとってウィンウィンの状況がつかれるのではないかと期待しています。その一方で、製薬企業のアンケータに答えたり、治験や臨床試験について理解したりすることもPPⅠの一つです。「トレーニングを受けていないからPPⅠに参加できない」と諦めずにできることから取り組んでいただき、より多くの方に新しい医療のための一歩を踏み出していただきたいと思います。

奥田さん VHOnetは以前からPPⅠに積極的に取り組まれているので、PPⅠパネルによって患者さんとの協働をよりスムーズに行えるのではないかと期待しています。より多くの方にPPⅠに参加していただいて、医薬品開発のパートナーとして、未来の患者さんに有用な医薬品を一緒に届けていきたいと思っています。

当事者の声を医薬品開発に活かし、日本での課題解決に役立てたいという製薬企業や研究者のニーズに応えて、ヘルスケア関連団体はその活動の一つとしてPPⅠに取り組むことが求められる時代になってきたのだと感じます。PPⅠパネルへの積極的な参加も期待したいですね。



※6 DE&I: Diversity(多様性)、Equity(公平性)、Inclusion(包括性)
※7 EMA: European Medicines Agency

※4 IMI: Innovative Medicines Initiative
※5 EUPATI: European Patients' Academy on Therapeutic Innovation

研究者や企業に働きかけて治療薬開発を実現 車いすユーザーのためのアプリも開発し、 社会貢献を目指す

2024年12月に販売が開始された「GNEミオパチー」^{※1}治療薬は、患者団体が行政や研究者、製薬企業に熱心に働きかけ、連携して取り組んだ結果として誕生した薬です。NPO法人PADM^{※2}（遠位型ミオパチー患者会）代表の織田友理子さんは、当事者としての視点を活かし、車いすユーザーのためのアプリ開発も実現し、国内外で注目される存在となっています。今回のフォーカスオンでは、織田さんに治療薬やアプリ開発の経緯と、活動を支える思いをお聞きしました。



NPO法人 PADM 代表
認定NPO法人 ウィーログ
代表理事
織田 友理子 さん

まず、治療薬開発の経緯を
教えてください

「GNEミオパチー」は、手足の先など体幹から遠い部位より筋力低下が始まり、徐々に全身に及ぶ進行性筋疾患の一種で、日本国内の患者数は1000人に満たないとされる希少疾病です。私たちは、2008年から任意団体「PADM遠位型ミオパチー患者会」として活動を始めました（2013年に法人化）。2009年にGNEミオパチーに対するシアル酸補充療法の有効性を研究するマウス実験が行われているこ

とを知り、研究代表者の西野三先生（国立精神・神経医療研究センター）に面会し、創業をお願いしました。また、難病指定と治療薬実現を訴えて署名活動を行い、6年間で204万人の署名を集めて厚生労働省に提出し、2015年に指定難病となりました。

並行して、治療薬開発を多くの製薬企業に働きかけましたが、莫大な資金がかかること断られ続けました。ようやく1社が公的助成を得られることを条件に協力を名乗り出してくれたので、行政機関への陳情を何度も行い、助成金を獲得。2010年から青木正志先生（東北大学）が中心となって医師主導治験が始まりました。そして、2024年3月に治療薬が正式に承認され、12月から販売が開始されました。

バリアフリーのアプリはどのような
きっかけで生まれたのですか

2010年に助成制度を利用してデンマークに留学し、現地の障がい者の活動を学び、単に支

援してもらおうのではなく、「面白そう」と思ってもらって健常者を巻き込む活動を目指したいと考えるようになりました。その後、2014年にバリアフリー情報を発信する「車椅子ウォーカー」という動画チャネルをつくりました。しかし、二方向的な情報発信ではなく、双方向で情報を共有できるプラットフォームが必要と

バリアフリーマップ「WheelLog! (ウィーログ)」アプリ



※1 GNEミオパチー：遠位型ミオパチーの代表的な型のひとつ

※2 PADM：Patients Association for Distal Myopathies

国連ハイレベル政治フォーラム (HLPF) でのスピーチ



私たちは、治療薬開発を目標に、「何もなければ、何も変わらない。」とスローガンを立てて署名運動や治験参加者募集などに取り組んできました。目標を明確にして、自分たちが今何をなすべきか、何が必要かと考えて広く発信しながら活動した結果、協力者が増えてきたという実感があります。治療薬開発が始まったからは、同じ目標に向かって製薬企業や研究者の皆さんと一緒に歩むという思いで、密に連携を取りながら私たちにできることは少しでも役に立ちたいと活動してきました。改めて、治療薬開発は本当に多くの皆さんの協力で実現したことで感謝しています。そして、私たちの取り組みが、まだ治療

行政や製薬企業への働きかけや連携に際して、 どのような点に留意しましたか

考えるようになり、米グーグル社主催の社会貢献アイデアコンテスト「Googleイノベーションチャレンジ」に応募し、グランプリ賞金5000万円を得ました。そして、福祉工学の研究者である伊藤史人さん(現・岩手県立大学)やロボット研究者の吉藤オリイさん(オリイ研究所)らの協力で、車いすユーザーが安心して外出できる「バリアフリーマップ」Wheelog! (ウィーログ) というアプリを開発したのです。

法のない難病の患者団体の活動のモデルケースになればいいと考えています。

症状が進行する中でも、精力的に活動 されている織田さんのモチベーション はどこから生まれてくるのでしょうか

私は、患者であり、重度障がい者ではありませんが、とても恵まれていると思っています。夫をはじめ、私という人間を理解し、手を貸してくれる人たちがいて、活動する場があります。こうした環境に恵まれている当事者は少ないですから、そのリソースを社会貢献に活かすべきだと思いますし、貢献することが私の生きがいになっています。

治療薬もアプリ開発も、私は実現すると信じていましたが、周囲には「実現できない大きな夢」と思われていたようです。しかし、本当に実現した今、周囲の空気が変わり、より信頼されるようになってきたと感じています。だからこそ、この信頼をさらなる社会貢献につなげていきたいのです。当事者として自分が感じる困難を、次の世代に引き継がないようにするため、問題解決につなげたい。自分が使命を果たせるのであれば、生きている限り使命を果たしたいと思っています。

団体のリーダーとしては、 どのような思いがありますか

希少疾病の患者団体は稀有な存在であり、大切な存在です。「Wheelog!」が評価され、車いすユーザーとしての側面が注目されるようになりましたが、PADMは難病患者の問題解決に取り組む団体であるべきと考えて、アプ

リの管理は別団体で行っています。診断を受けた際、医師からは「患者数が少ないから同じ病気の人に会うのは難しいだろう」と言われました。しかし、インターネットが発達して全国の患者さんとながれるようになりましたし、私は首から下が動かせませんが、視線入力装置で国内外の人とコミュニケーションができています。想像の域を超えて社会が変わり、私たちを取り巻く状況も変わってきました。だからこそ、時代に合わせて、常に活動をアップデートしていく必要があると思います。その一方で、インターネットやSNSで患者同士がつながることはできますが、ただ知り合うのではなく、患者が安心してつながり、より良く生きるという思いを分かち合えるのは患者団体だと思っています。これからも、何があっても安心してつながれる場の提供という、団体としての使命を守りつつ、社会的に信頼される活動に取り組みたいと思います。

取材を終えて

まねきねこの視点



『まねきねこ』では以前から、治療薬開発に向けたPADMの活動に注目してきました(2012年第32号掲載)。行政や研究者、企業、支援者との連携や協力を得て、前向きに進む織田さんの活動は、多くのヘルスケア関連団体の皆さんにとっても参考になるのではないのでしょうか。

織田 友理子 さん プロフィール

NPO法人PADM代表、認定NPO法人ウィーログ代表理事。2002年22歳で遠位型ミオパチーと診断される。2005年に結婚、翌年長男を出産。2019年国連後援のワールドサミットアワードでグローバルチャンピオンを受賞。2023年ジャパンSDGsアワードにおいてSDGs推進本部長(内閣総理大臣)賞受賞。2025年7月国連本部での国連ハイレベル政治フォーラム(HLPF)で、日本のSDGsに関する取り組みの発表に参加。

NPO法人 PADM(遠位型ミオパチー患者会) <https://npopadm.com/>
みんなで作るバリアフリーマップWheelog! <https://wheelog.com/hp/>

活動紹介



第55回 関東学習会

さらなる展開につなげるために
VHO-netの果たしてきた
役割や経緯を知る

(2025年6月7日 ハイブリッド開催)

第55回関東学習会が、東京のファイザー株式会社社会議室と、オンラインによるハイブリッド形式で行われました。「私たちの社会的存在意義を私たちの言葉で語ろう」を年間活動目的としている関東学習会では、「改めてVHO-netを考える」を今回のテーマに設定。VHO-netが目指していることや、そのために必要な活動や役割について共有することを意図した内容です。

まず、VHO-net監事の喜島智香子さん(ファイザー株式会社)が、VHO-netの成り立ちや法人化後の活動について紹介。続いて、VHO-net代表理事の増田一世さん(やどかりの里)が

「VHO-netと私たちの役割について」と題して、「患者と作る医学の教科書」や「VHO-netが考えるピアサポート5か条」の発行などの取り組みや、企業との関係性、主体性をもった活動のあり方、今後の活動の広がりへの期待などを述べました。次に、日

参加団体

- あけぼの会 あけぼの埼玉
- 日本ALS協会 沖縄県支部
- 沖縄県網膜色素変性症協会
- NPO法人 がん患者団体支援機構
- がんの子どもを守る会 熊本支部
- CMT友の会
- しらさぎアイアイ会
- (一社)全国心臓病の子どもを守る会
- NPO法人 東京難病団体連絡協議会
- 富山IBD
- (公社)日本オストミー協会 横浜市支部
- NPO法人 日本オスラー病患者会
- NPO法人 日本マルファン協会
- NPO法人 PAHの会
- (公社)やどかりの里

本オストミー協会の山根則子さんが、「VHO-netとの出会い」として、活動に参加してさまざまな役目を担うことで学びや気づき、勇気やモチベーションを得て、所属団体や地域の活動にも活かしてきたこと、その成果とも言える現在の取り組みなどについて述べました。その後、発表の感想や今後の活動について話し合うグループ討論を実施。グループ発表では、「多様な団体のメンバーとの対話で気づきや元気が得られる」「リーダーシップの大切さを学んだ」「PPIに取り組み、学んだことが団体の活動に役立った」「もっと広く私たちの声を届ける方法を考えていきたい」「緩やかなつながりで若い人を活動に巻き込んでいきたい」などの意見が紹介されました。

今回は、初参加者も多く、またオンラインでは全国各地からの参加もあり、多様な意見が交わされ、多くの気づきが得られる場となったようです。

参加団体

- いしかわSCD・MSA友の会
- 北陸リウマチ膠原病支援ネットワーク
- 富山IBD
- 日本ALS協会 富山県支部
- ポリオ友の会 東海
- 全国膠原病友の会 高知支部
- 認定NPO法人 アンビシャス

への接続が前提であるため、車の電源は外部バッテリーに充電してからの利用を推奨、日頃から給電

第36回北陸学習会がオンラインで開催されました。テーマは、「みんなの防災常備ってどんなこと? 座談会〜北陸編〜」です。

まず、公立穴水総合病院の影近謙治さんが、「障害者の災害時の対応を考える〜弱者を排除しない共助社会づくり〜」と題して講演を行いました。能登半島地震で大きな被害を受けた輪島市に隣接する穴水町。避難所でのトイレの環境整備、体操指導、災害後の地域リハビリテーションの取り組みや、地域の信頼と絆がつくる社会資源の重要性などについて語られました。

続いて、石川トヨベツカローラモビリティ・地域貢献推進室の山崎桜子さんが「電気が動くとできること TOYOTAの給電」というテーマで講演。給電機能をもつ車があれば、非常用電源として活用できライフライン復旧までの大きな安心材料になると、人工呼吸器などの医療機器は家庭用コンセント



第36回 北陸学習会

能登半島地震を振り返り
防災への取り組みに活かす
座談会を行う

(2025年6月15日 オンライン開催)

方法を確認しておくことの大切さなどが述べられました。

2つの講演を受け、3グループに分かれて座談会へ。まよめの発表では、「安否確認は団体で地域ごとにまとめた」「簡易トイレは種類により捨て方が異なり問題になった」「IBD当事者だが避難所に食べられるものはなく、備蓄の大切さを痛感した」「給電車の利便性を理解した」などの意見が挙がったほか、「要冷蔵の薬の保存をどうするか」などの課題も浮き彫りになりました。

それぞれの能登半島地震を振り返り、その教訓と防災意識・知識を新たにする学習会となりました。





活動紹介 第64回 (2025)

*その他の地域学習会の報告は、VHO-netのウェブサイトをご覧ください

りについて学んできました。今回は、社会とのつながりを事例から学ぶことを目的に、全国心臓病の子どもを守る会岩手県支部長の菊池信浩さんと、ME/CFS支援ネットワーク理事の赤垣敏子さんが発表を行いました。菊池さんは、教育機関とのつながりと題して、小・中・高・大学等の学校への出前授業や、学生ボランティアとの協働を紹介。活動に参加した学生が医療者や教育者となり、その後も団体にかかわる例もあり、社会への広がりを期待していると述べました。赤垣さんは、行政とのつながりをテーマに、市長への要望書提出の経緯や、行政関係者との情報共有や連携を紹介。患者が安心して



第46回東北学習会が、せんだいメデアテークとオンラインのハイブリッド形式で開催されました。東北学習会では「難病・障がい者・誰でも生き生きと暮らせるために」をテーマとして、昨年からヘルスケア関連団体の目的と役割、社会とのつながり、暮らすためには行政とのつながりや信頼関係を深め、声を届け続けることが大切だと訴えました。グループ討論では、事例発表への感想や所属団体での取り組みなどについて話し合いを実施。グループ発表では、「団体がもつ知識や経験は大きな社会資源」「教育や行政だけでなく、他団体とつながり、ともに支え合うことが必要」「次世代へのアプローチが必要」などの意見が挙がりました。その後、全国保険医団体連合会事務局の曾根貴子さんが講演を行い、マイナ保険証を取り巻く課題などを紹介しました。

最後に学習会全体の感想を述べ合い、東北福祉大学講師の工藤洋子さんは、「当事者と健常者の壁を取り除くような活動が必要だと、改めて感じた」と発言。多くの事例や課題を共有し、それぞれの立場から社会とのつながりについて考える機会となりました。

参加団体

- 仙台ポリオの会
- 全国膠原病友の会 福島県支部
- ME/CFS支援ネットワーク
- (一社)岩手県腎臓病の会
- 全国心臓病の子どもを守る会 岩手県支部
- 患者会ピンクのリボン
- 乳腺患者会 プリティふらわ
- NPO法人 宮城県患者・家族 団体連絡協議会
- (公社)日本オストミー協会 横浜市支部

第46回 東北学習会

教育や行政との連携の事例を学び
社会とのつながり方を学ぶ

(2025年7月5日 ハイブリッド開催)



第47回 沖縄学習会

意思決定ガイドを実践し、
ヘルスリテラシーについて学ぶ

(2025年7月6日 対面開催)



第47回沖縄学習会が、浦添市産業振興センターで開催されました。今回は、第24回ヘルスケア関連団体ワークショッブを踏襲し、ヘルスリテラシーについての学びがテーマです。まず、聖路加国際大学大学院看護学研究科教授、中山和弘さん製作の動画「なぜ私がヘルスリテラシーに注目するのか」を視聴。その後、同教授が監修しファイザー株式会社が発行した冊子『納得する治療を選択するために大事なこと！ーヘルスリテラシーって何だろうーvol.1解説編』の、「合理的な意思決定胸に『お・ち・た・か』」の部分の読み合わせを行いました。

参加団体

- 日本ALS協会 沖縄県支部
- 日本オストミー協会 沖縄県支部
- 全国膠原病友の会 沖縄県支部
- 沖縄県網膜色素変性症協会
- 認定NPO法人 アンビシャス



続いて、「お・ち・た・か」意思決定ガイドに沿って、自分のストレス対処法について、おIIオプシオン(選択肢)、ちII長所、たII短所、かII価値観の各項目を記入し発表しました。「長所・短所の記入は考えを整理する訓練になる」「選択肢を見ると、家族に話す、インターネット通販をするなど、依存傾向にあることがわかった」「自分はストレスに弱いと感じたなど、意思決定ガイドによる自己分析での気づきがあったようです。全体討論では、「身近な人の意見に惑わされがち」「なぜ、根拠のない情報に流されるのか」「自分主体で決める」「幸福感につながる。自己決定ができるようになりたい」「沖縄独特の文化としてユタ(霊媒師)に意見を聞くケースも多い」「日本人は他人がどうしているのか気にしやすい」など、信頼できる情報を正しく選ぶための方策や課題について意見が交わされました。

ヘルスケア 仕事探訪 第5回

精神保健福祉士

心のケアと生活支援
双方が求められる専門職

病院から司法施設まで 幅広い領域に従事

精神保健福祉士は、1997年に誕生した精神保健福祉領域の国家資格です。心に病や障がいのある人の相談や、社会復帰への訓練などを行い、他職種とも連携しながら、生活課題の解決やサポートを行う仕事です。

長らくPSW (Psychiatric Social Worker) の略称で認知されてきましたが、近年、国際的にも一般的なMHSW (Mental Health Social Worker) という呼称が広まりつつあります(以下、MHSWと表記)。その背景には支援対象が、精神障がい者に限らず、メンタルヘルス(心の健康)に課題のある人にまで広がっていることがあります。また、配属される場所は精神科病院にとどまらず、多岐にわたります。

■精神科医療機関

受診や入院に伴う患者や家族の悩みを受け止めながら、医師の診療に必要な情報を聞き出します。また、困りごとを聞き、支援する役割を担います。退院支援では、家族や施設の受け入れを調

整し、復学や復職、住む場所の確保などの解決策を探っていきます。

■行政機関

障がい者福祉に関する相談窓口となっている市区町村役場で、地域住民からの相談や各種手続き、福祉サービスを利用するための支援などを行います。精神保健福祉センターや保健所では、心の健康に関する地域全体の課題に取り組んでいます。

■司法施設

「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」(2003年制定)により、社会復帰調整官や精神保健参与員への任用があり、また、刑務所、少年院などの矯正施設でも配置が進んでいます。

■教育機関

いじめや不登校、その他さまざまな生活上の問題についての相談援助を行います。家庭や地域の関係機関の中心となり、地域ぐるみの支援に取り組んでいます。

■産業分野

職場で増えつつあるストレス性疾患の予防やうつ病対策、職場復帰のための研修など、働く人の心の健康を守るための取り組みが進められています。

人に寄り添い、
答えを導き出すこと
やりがいを見出す

高ストレス社会といわれる現代。心の病気は誰もがかかる可能性のあるものです。大きな社会問題となっている自殺、虐待、引きこもり、いじめなども、精神的な問題と深いかわりがあり、また、甚大な事故や災害時には心のケアの専門家の配置が求められています。そんなMHSWは、どんなときにやりがいを感じているのでしょうか。「病状が落ち着き、患者さん自身の本来の力が発揮され、いきいきと過ごす姿を見たとき」「人生の再スタートを踏み出す場面に立ち会える」「マラソンの伴走者のようにサポートしている」など、病気や生きづらさを抱える人に寄り添い、ともに解決策を見つけていくことに、大きなやりがいを感じているようです。さまざまな深刻な課題を抱える現代社会から、期待が寄せられている仕事といえます。

仕事DATA

- 人数 113,121名
※2025年5月現在、(公財)社会福祉振興・試験センターへの登録者数
- 精神保健福祉士 試験受験資格
学歴や実務経験、養成施設の修了などにより、11のルートが設定されている。保健福祉系大学卒業ルート、同系短大を卒業し相談援助実務を経験するルート、一般大学・短大を卒業し相談援助実務の経験や一般養成施設で学ぶルートなどがある。
- 勤務先
病院、自治体・保健所、福祉事務所、精神保健福祉センター、地域活動支援センター、児童養護施設、矯正施設、教育機関、企業など

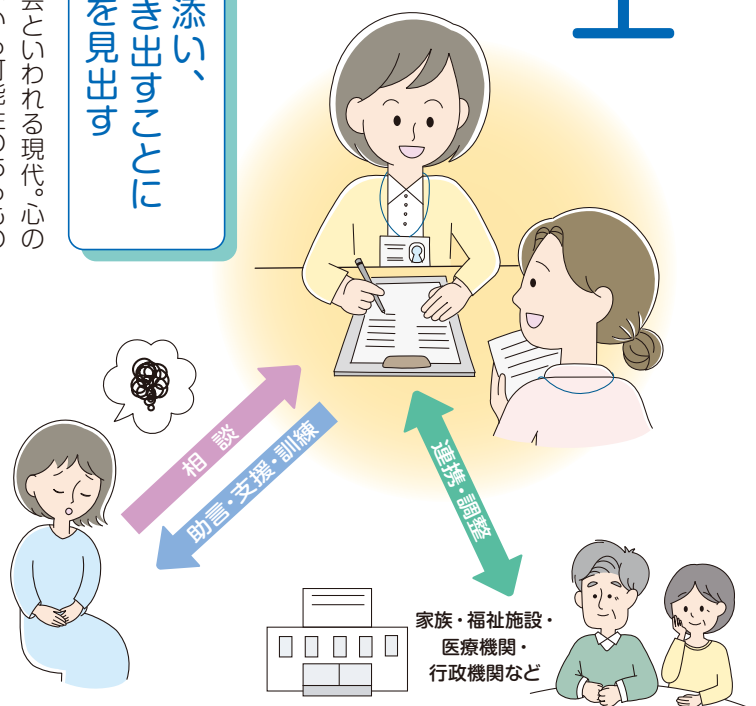
参考URL・文献

(公社)日本精神保健福祉士協会 <https://www.jamhsw.or.jp/>

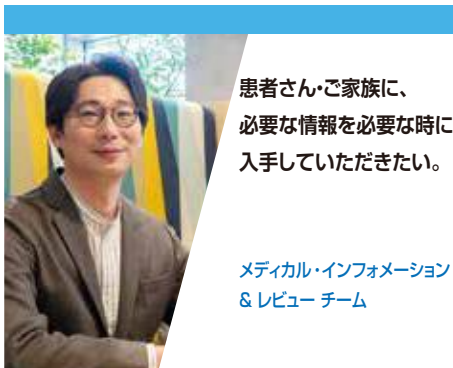
(公財)社会福祉振興・試験センター <https://www.sssc.or.jp/>

田中英樹 菱沼幹男編著『社会福祉士・精神保健福祉士になるには』ベリかん社 2021

WILLこども知育研究所編著『精神保健福祉士の一日』保育社 2017



「知りたい情報」は何かを考え、 日々進化する情報サイト



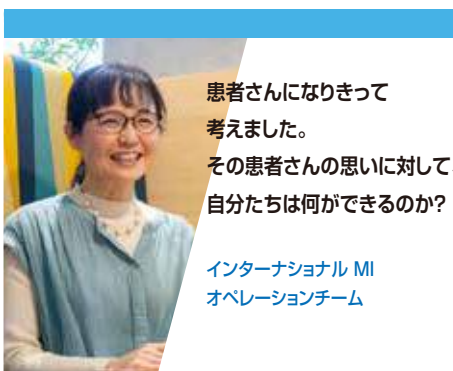
患者さん・ご家族に、
必要な情報を必要な時に
入手していただきたい。

メディカル・インフォメーション
& レビュー チーム

**ファイザーの医薬品を
処方された患者さんと
ご家族に向けて**

医療用医薬品は医師の処方管理のもとで使用される医薬品で、医療機関を通じて患者さんに届きます。ファイザーは2021年、ファイザーの医薬品を処方された患者

ファイザーでは、患者さんのヘルスリテラシー向上の一環として、「患者さん向けくすりの情報提供サイト」でファイザーのおくすり情報を手でできるようにしています。ここではそのウェブサイトの運営担当チームの取り組みをご紹介します。



患者さんになりきって
考えました。
その患者さんの思いに対して、
自分たちは何ができるのか？

インターナショナル MI
オペレーションチーム

さんとそのご家族向けに「患者さん向けくすりの情報提供サイト」を開設しました。自社の全医薬品に関する情報を掲載した、総合的な医薬品情報提供サイトで、患者さん向けのQ&Aを掲載し、薬剤名と知りたい情報のキーワードで検索すると、服用方法、主な副作用、保管方法などのさまざまな情報が得られるようになります。

Q&Aのサンプル



**適正使用、
安全性の情報などを
必要な時に確認できる**

このウェブサイトは、ファイザーの医薬品を処方されている患者さんやご家族の方を対象に、くすりの適正使用や安全性などに関する正しい情報を提供することが目的です。各医薬品についてわかりやすく説明した「くすりのしおり」「患者向医薬品ガイド」をはじめ、添付文書など、医薬品の基本的な情報がわかる資料や、各種お役立ち情報が確認できます。特に、知りたい情報をキーワードで検索することで、たとえば「飲み忘れたらどうしたらよいですか?」「どのように使用したらよいですか?」といったQ&Aを参照できることが特徴です。



こちらのサイトからファイザーのおくすりを正しく安全にお使いいただくための情報がご参照いただけます。

<https://www.pfizermedicalinformation.jp/?gp>



ファイザーでは、自社の医薬品を処方されたより多くの患者さんとそのご家族に、正しい情報をわかりやすく、必要な時に届けたいという思いで、ウェブサイト運営しています。こちらの詳細な記事は、ファイザーの一般向け企業サイトからご参照いただけます。

<https://www.pfizer.co.jp/pfizer/company>
(会社案内→ファイザー日本法人最新の取り組み)

ファイザープログラムの助成を受け活動した団体、その後をレポートします。

OHANA

一般社団法人

ものづくりを通して、性被害当事者が 安心して過ごせる居場所を提供 社会復帰につなげる



一般社団法人 OHANA
代表理事
赤松 未来 さん

性被害当事者が自尊心や自己肯定感を回復し、生活を再建するには、安心して過ごせる居場所が必要とされます。(一社)OHANAは、緊急的なニーズにも対応しつつ、アトリエや農園といった当事者が継続的に立ち寄れる居場所を提供し、心のよりどころとなる“ものづくり”を通して支援に取り組む団体です。過去の性被害を誰にも相談できず、一人で悩みを抱え込んできた当事者にも寄り添う息の長い支援を行い、地域でのセーフティネットづくりを目指す同団体についてご紹介します。

活動内容やその背景について教えてください

私たちは性被害当事者に対して支援活動を行っている団体です。『オハナ』とはハワイ語で家族という意味で、当事者の家族になりたいという思いから名づけました。

活動としては、相談業務(電話・メール・来所)や、関係機関への同行支援、緊急時の受け入れなどに加えて、『ものづくり』をツールとして、社会復帰を目指した継続的な支援に取り組んでいることが特徴です。「被害を話すことはつらいが、安心して過ごせる居場所がほしい」という当事者に居場所を提供し、ものづくりを通して信頼関係を築き、社会参加のきっかけにすることや、ものづくりを目的に何度も足を運んでもらう

ことで孤立を防ぎ、中長期的な支援につなげていくことを目指しています。さらに、当事者がものづくりのスキルを身につけ、ネットショップやイベントなどで作品を販売できるように支援することで、社会復帰の準備や就労体験となることも視野に入れていきます。「作品が売れる」ことで、自分が求められていると実感して、自尊心や自己肯定感を取り戻すといった効果も期待しています。

ファイザープログラムによりどのような活動に取り組んだのですか

小物雑貨やアクセサリーのハンドメイドができるアトリエの整備に加え、地域の農地を活用した畑作業により、ものづくりを充実させて、性被害当事者の心身のケアと、安心して

社会復帰の準備(就労スキルの習得支援、就労支援)ができる場所を確立するというプロジェクトで応募しました。

具体的には、ファイザープログラムの助成がスタートした2023年から、地域の農家から無償で提供された農地でハーブや花、野菜の栽培に取り



夏休みこどもわくわくフェスタ2025(平塚市)に参加。
子どもたちと石鯿づくりを行う

Pfizer Program

ファイザープログラムは、ヘルスケアの視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、心とからだのヘルスケアの分野で活躍が期待される市民活動・市民研究を応援する助成プログラムです。2000年に創立されて以来、疾病や障がいを抱える方をはじめ、生活困窮者や公的制度の狭間で支援を必要とする人など、従来のヘルスケアの枠では捉えられないような対象者を支援し、また、多くの助成プログラムでは対象とならない人件費や家賃・光熱費等をカバーするなど特色のある取り組みを続けています。今回は、2022年度と2021年度に選ばれ、その後3年にわたって助成を受けてきた2つのプロジェクトをご紹介します。

※継続助成募集は2023年度で終了



地域のイベントで作品を販売

自分たちで栽培したラベンダーでポプリを製作

組み、ハーブはポプリに、花はドライフラワーに加工して販売しています。畑作業は、ハンドメイドが苦手という方にも参加してもらえますし、経済的に厳しい状況にある方に収穫した野菜を渡すこともできます。農家の方が栽培についてアドバイスしてくださるなど地域との交流もできるようになりました。また、被害を受けて発症した精神疾患やその治療薬によって、不眠や夜型の生活

ファイザープログラムは どのような点が よかったですか

になつてゐる当事者も少なくないのですが、昼間、畑作業に参加することで、朝起きて夜は眠るという本来の生活リズムを取り戻すこともでき、とてもメリットの大きい取り組みだと感じています。

助成金の使い道の自由度が高く、さまざまなことに挑戦できる機会が得られるのが、とてもありがたかったと感じています。農地の活用にあたっては、土壌改良やトラクター購入から始めたことで、その後の活動がとても充実しましたし、今まで接点のなかった近所の農家の方など地域の協力が得られるようになりました。また、プロジェクトの申請や報告といったプロセスの中で、さまざまな助言を受けて団体運営や活動について学べたことも大きかったと思います。単年度ではなく、1年目、2年目、3年目と助成を続けて受けられることで、活動を広げたり充実させたりしていくことができ、常に見守ってもらっているという安心感が得られました。ファイザープログラムを通じて知り合った皆さんの顔を思い浮かべることで勇気づけられることもあり、「助成金だけではなく、心や力もいただいた」と感じています。

当事者を支援するうえで、 どのような課題が ありますか

当団体への相談者は40代の女性が多く、これは神奈川県全体でもみられる傾向です。DV防止法やストーカー規制法※がなかった時代に性被害を受けて、公的支援や適切な支援を受けられず、誰にも相談できなかったという人が、近年の芸能界の性被害報道などに接してフラッシュバックを起している例が増えているのです。また、性被害を受けたことで精神疾患を発症して、服薬を中心とした精神疾患治療しか受けることができなかったケースや、家族や親族からの性虐待等で所轄が児童相談所であったために、性被害に特化した治療が受けられなかったケースなど、複雑化した相談も増えています。性被害の背景には経済的な問題や家庭的な問題などがあることも少なくありません。こうした公的支援の対象になりにくい当事者の支援が大きな課題だと感じています。

では、今後に向けての 展望を聞かせてください

農地の活用を通して地域からの当団体への理解も深まっていますので、一歩進めて、近隣の保育園などでの野菜の出張販売を計画しています。

一般社団法人 OHANA

2016年12月任意団体設立。2019年9月非営利型の一般社団法人 OHANAへ移行。神奈川県平塚市を拠点に活動。2022年にファイザープログラム新規助成に応募して選定される。

プロジェクト名と助成額

- 2022年度(1年目) 「ものづくり」をツールとして、性被害当事者が安心して心身を回復し、社会復帰を目指す居場所の確立と地域ネットワークの構築事業 250万円
- 2023年度(2年目) ものづくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指す居場所の確立 250万円
- 2024年度(3年目) ものづくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指す居場所の確立 280万円



<https://www.yhw-ohana.com/>

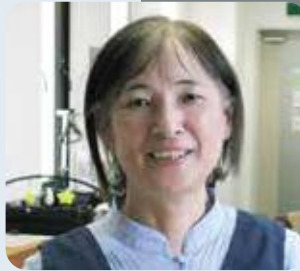
また、平塚市では2025年から犯罪被害者等支援条例が施行され、当団体の活動に協力したいとの意向もあるので、登録団体申請を予定しています。

最近、支援を求めてこられる当事者の方たちが立ち直られて、社会復帰につながるケースが増えていますので、私たちもさらに活動を充実させて、当事者がより暮らしやすい、社会復帰しやすい地域へと変えていきたいと考えています。公的支援が受けられない当事者も安心して働き、暮らせる環境を整えるため、地域イベント出展などを通して地域とのつながりを深め、当事者が安心して生活できる民間セーフティネットを構築し、行政とも連携しながら、社会参加や経済的自立がしやすい地域づくりを目指したいと思っています。

※DV防止法：配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律
ストーカー規制法：ストーカー行為等の規制等に関する法律

ファイザープログラムの助成を受け活動した団体、その後をレポートします。

グルテンフリーの食事が話題を集めたり、商品パッケージにアレルギーが表示されるなど、近年、食物アレルギーは社会で認知され、ある程度の対応、配慮がなされるようになってきました。しかしながら、人生の各ステージで食物アレルギーの子どもが抱く疎外感の残存、災害時対応などには配慮が行き届いていません。ファイザープログラムを活用し、子ども視点の自立支援の調査研究を実施し、課題に取り組む、FaSoLabo（ふあそらぼ）京都の創設者であり理事の小谷智恵さんにお話を伺いました。



認定NPO法人 FaSoLabo京都
理事

小谷 智恵 さん
おだに ともえ

認定NPO法人

FaSoLabo 京都

子どもの視点からの自立支援と食物アレルギー児・家族のQOL向上を図る

設立の経緯と社会的な背景について教えてください

当団体は、食物アレルギーの子どもの家族のQOLの向上を目指し、任意団体として2005年に発足。食物アレルギーの私の長男が小学校入学のタイミングでした。当時は、食物アレルギーがあると保育園入園もままならず、小学校や学童保育でも対応や理解が広まっていなかった。当初の活動は、ニュースレターを発行し、アレルギーに関する情報を発信。保護者だけの会ではなく、医師、行政、子育て支援者との横のネットワークの構築を目指し、保育園・幼稚園・学校・地域の子育てサークルでの食物アレルギーへの理解を求めてきました。ところが活動を続ける中、子どもの

ためとは思いつつ、保護者目線での子育て支援になっていないかを感じるようになってきました。きっかけは5年ほど前の中学生への調査です。「周りの大人や学校にしてもらったことでよかったことは」との問いに、「一人が、「何一つ、うれしかったことはない」と回答し、私の心に突き刺さりました。私たちの活動が、子どもにとってよかったのか、検証をしてこなかったことに気づいたのです。そんな気づきもあり、ファイザープログラムの市民研究の種別で、「食物アレルギーの子どもの必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」を申請し採択されました。

ファイザープログラムの内容やよかった点について教えてください

長期で調査・分析に取り組みたいと

考えていたので、3年間の継続助成があることが大きな魅力でした。1年目に調査を行い、2年目は調査票には現れていない声を拾う、3年目はインタビューなどで、紙での回答と実際の声の違いはどうかを比較し、医師との考えの違いも調べたい。そんなシナリオを描きました。

領収書の提出が不要なことは、ほかの助成金ではあり得ないことで驚きました。私たちのことを信頼してくれていることが伝わり、誠実に対応しなければと、よい意味でのプレッシャーになりました。また、計画変更に対する自由度が高く、提出した計画よりも、こちらの方が重要だと思えば変更できる。研修を受けたい、学会に参加したいとなったときも費用を転換でき、とてもありがたいと思いました。

私事ですが、2019年に社会福

「Fa」は food allergy (食物アレルギー)
「So」は social work (ソーシャルワーク)・
sower (種をまく人)
「Labo」は Laboratory (研究所)



ニュースレター

調査では、小学生から大学生まで、さまざまな年代の子どもたちの声を聞くことができました。年代によつて、抱える思いは違ってきました。小学校の低学年では、命を守るためにも、食物アレルギーであることと言いなさいと患者教育されます。高学年になると放課後にファストフード店に行くときにどうするか、中学生では修学旅行や学校行事のときには言う必要がある、高校生では食物アレルギーがあるから就けない職業があるのではないか、大学生になり家を離れると、自分が食物アレル

調査・研究から どんな成果や課題が 見えてきましたか？

社士の資格を取り、助成期間中の2023年には調査の分析方法を学ぶために大学院に入学。現場と研究者、両方の視点をもつことを目指しました。

ギーだと知る人がゼロになり、自分がいかに地域で守られていたかを知り、これからは自分で判断していかなければと思う。これらはほんの一例ですが、こういうタイミングでどんな風に周囲に伝えればよいのか、あまり教えられていないのです。

食物アレルギーではない高校生や大学生にも調査を広げたことは大きな成果でした。ニュースなどで食物アレルギーのことは何となく知っていたが、身近にいたらどう接すればよいのか、外食に誘うにはどう声かけすればよいのか、友だちを思つての声が多く見られました。見えない疾患だけに、伝える方も伝えられる方も気をつかう、難しい問題です。食物アレルギーの子ども自身が望む生活や未来のために、社会に向けて発信できる環境をつくるのが大切です。

今後の展望について 教えてください

この20年間で、食物アレルギーへの理解は徐々に広がってきました。ただ、私たちの世代が、食物アレルギーでの死亡事故などもあった関係から、子育ての大変さを前面に伝えてきたと思います。そのことで、地域社会で食物アレルギーの子どもを受け入れるのは難しいと、逆にハードルを上げてしまったのではないかと反省もあります。



京都市乳幼児親子のつどいの広場 びいちゃん



2022年から始めた「どれみ隊プロジェクト」は、食物アレルギーの有無にかかわらず、集まった子どもたちが挑戦したいこと、社会に伝えたいことをサポートする活動です。米粉のパンを作る調理体験や、身近なお店で食べられるお菓子を探す、防災などのテーマで、活動に取り組んでいます。「京都市乳幼児親子のつどいの広場 びいちゃん」は、京都市からの委託事業で、食物アレルギーがあつてもなく

認定NPO法人 FaSoLabo京都

- 2005年4月 任意団体「びいちゃんねっと」として設立
 - 2009年3月 「NPO法人 アレルギネットワーク京都 びいちゃんねっと」に改組
 - 2015年 京都市子育て支援活動いきいきセンター事業を受託し、乳幼児親子のつどいの広場を開所
 - 2018年 「認定NPO法人 FaSoLabo京都」へ法人名変更
- プロジェクト名と助成額
- 2021年度(1年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額131万円
 - 2022年度(2年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額150万円
 - 2023年度(3年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額150万円



でも親子が集える場所です。子育て相談員が常駐し、誰でも利用でき、その中で食物アレルギーの正しい理解や配慮も伝えていきます。これからも、子どもの声を聞く・届けるというスタンスで、研究や活動に取り組んでいきたいと考えています。



<https://fasolabo-kyoto.jimdofree.com>

患者の力

人類にとつての ケアの姿とは

はじめに

21世紀はケアの時代ともいわれています。社会の高齢化と慢性疾患患者の増加のために、ケアを受ける人の数が急激に増加していることが二因です。しかし、それだけではなく、AIやロボット技術・ITC(情報通信技術)の発展により、人が行うべき仕事は機械ではできないものへと移行していくと考えられるため、ケアが注目されているのです。今後、社会の中でケアのニーズは量的に増えるだけでなく、質的にも飛躍的に高められることが期待されます。

記憶力やロジックによる判断、画像処理による診断などはAIの進歩に伴い、近い将来人間を凌駕するといわれています。そのときに、人間がやるべきこととして残されるのが「ケアとアートと祈り」というのがわたしの推測です。そして、その三つの中ではケアがそれらの根底にあります。

ケアの起源、ケアの本質は 毛づくろいに始まる

それでは、ケアとは一体どのような行為なのでしょう。か？ 梶田昭による『医学の歴史』¹⁾では、医療は人類の始まりとともにあったと述べられています。そして、医療の原型は人類が存在するより前から存在していたといいます。たとえば、鳥やサルでは、毛づくろい(グルーミング)をする行為がみられ、その

行為は2億年以上前から存在していたのです。

チンパンジーの毛づくろいを観察すると、相手の肉体の欠陥部位を見つけ、たとえば小さな腫れ物や傷などをなめてきれいにするそうです。灰のかけらが目に入ったサルに対して、別のサルが両手で灰を取り除こうとする行為も見られるそうです。ここまでくれば、その行為は医療に相当するものであると誰もが考えるのではないのでしょうか。

キツネザルの毛づくろいはもっぱら衛生上の理由であり、ほかのサルに毛づくろいしてもらうのは、自分の手が届かない部位(頭皮や背中)に集中するのだそうです。毛づくろいがお互いを有益な行為、お返し(の行為とする社会協定があるようです)。ダンバーは、毛づくろいがお互いを助け合わせ、その行為が集団生活を生み出したと、以下のように述べています²⁾。

社会的グルーミングを行なう哺乳類は多いが、霊長類ほど活用している例はほかに見あたらない。社会性の強いサルや類人猿ともなると、一見取るに足らないこの活動に「日の五分の一」を費やすのだ。相手の毛を少しずつかきわけては「ごみや草」かさがたなどを取りのぞくのだから、意味がないわけではない。けれども社会的グルーミングの真の価値は、毛のなかに指をすべりこませ、皮膚に軽く、ゆつくりと触れる手の動きにある。この動きに反応するのが、脳に直結しているC触覚線維と呼ばれる求心性神経だ。

筆者



慶應義塾大学 名誉教授
加藤 眞三 さん

その唯一の役割は脳の奥深くでエンドルフィンの分泌をうながすことにある。(中略)日常的にグルーミングし合う相手に責任と恩義を感じれば、それが社会の結束を保つ接着剤となる。ただグルーミングは親密度の高い行為なので、相手は数に限りがあり、それがすなわち結束社会集団の上限となる。サルおよび類人猿では50頭前後である。(中略)そのためサルと類人猿の場合、結束社会集団の大きさはおよそ50頭で頭打ちになる。私たちの祖先は、社会集団を拡大する必要に迫られたとき、二人以上に同時にグルーミングする方法はないかと知恵を絞った。こうしてたどりついた唯一の現実的な解決策が、直接触れることなくエンドルフィン分泌をうながす一連の行動だった。それはいまも、私たちの社会的な相互作用の中核となっている。獲得した順に行動を並べると、笑うこと、歌うこと、踊ること、感情に訴える物語を語り、宴を開くこと(みんなが食事をして酒を飲む)で、最後に忘れてはならないのが宗教儀式だ。いずれも言葉に依存するため、ヒトにしかできない行動である。唯一の例外があるとするれば、最も早くから存在した笑いだろうか²⁾。

つまり、毛づくろいが受け手のエンドルフィンを高め、免疫力を高め、幸福感や快感をもたらし、集団の結束を高めるのです。結果として、人類の集団はより大きくなります。お互いにグルーミングできる規模の約50人を超えたために生み出されたのが、笑い、歌、踊りであり、物語を語り、宴、そして宗教であるということです²⁾。

参考図書

1) 梶田昭『医学の歴史』講談社学術文庫 2003年

2) ロビン・ダンバー 著/松浦俊輔・服部清美 訳「ことばの起源 猿の毛づくろい、人のゴシップ(新装版)」青土社 2016年

3) ロビン・ダンバー 著/小田哲 訳/長谷川眞理子 解説『宗教の起源 私たちにはなぜ(神)が必要だったのか』白揚社 2023年

このような視点に立つと、毛づくろいをするというケアの行為が、言葉、芸術、会食、お祭りや宗教の根底にあったことがわかります。そして、それらが人類を特徴づけ、繁栄させてきたのです。高学歴で理知的な人はたわいもない会話(ゴシップ話)を軽視する傾向がありますが、実はこのゴシップ話が人間の連帯を高めるうえで重要な行為でもあったといえます²⁾。人間としての最も本質的な活動は、ケアに始まり、言語やアートにつながり、さらに宗教を生んだのです³⁾。

ケアとは

ケアとは、本来「気遣い、配慮、世話」などの意味をもつ言葉です。他者とかかわりの中で生まれる最も人間らしい行為です。わが国でスピリチュアルケアの普及に取り組んでこられたキッペス神父は、ケアについて次のようなことを述べています⁴⁾。

ケアされること、ケアすることは、ともに最も人間的な行為である。人間は人間である以上お世話になる存在であり、お世話になるのは当然である。人間は一人で生きていられず、相互にお世話にならざるをえない存在である。お世話になることは病気になるためではなく、人間であるからである⁴⁾。

ケアにはその行為を通じて、ケアされる側だけでなく、ケアする側にも力が与えられる側面があります。それは人間として生きることの普遍的な欲求に基づいているからです。「愛のホルモン」とも呼ばれているオキシトシンというホルモンは、愛する心や共感・寛容する心を育んだり、信頼する気持ちや高めたりします。オキシトシンは、暖かい環境や身体接触、他人に親切にされたり、親切にしたりすることにより、分泌が増加します。そのような物質が分泌されるような遺伝子を、人間は与えられた存在なのです。

職業としてのケアの問題

ケアは本来家庭の中やコミュニティの中で行われてきた行為でした。乳幼児のケアに始まり、高齢者のケア、そして病人のケアや障がい者のケアなどは通常家庭内で行われ、多くの場合、女性がその仕事を担ってきました。

しかし、その後の社会の発展で、仕事の分業化が始まり、ケアも社会の中で職業として行われることになり、家庭内行為が外部化されてきました⁵⁾。人間社会が高度化・分化してきた必然の結果です。教育や医療も、かつては家庭の中で行われてきましたが、社会の発展で、仕事は外部化されてきたことと同じ流れです。

教育や医療が専門性の高い職業としての一定の地位を築いてきたのに比べて、ケアは専門性や熟練性が低い仕事とみられてきました。ケアは女性の仕事であり、(実際にはそうではないのですが)誰にでもできる仕事であり、供給者も無尽蔵にあると考えられてきた面もあります。

ケアは、その技術が高度化したため外部化したのではなく、家族や共同体が相互扶助の形で担っていたものが、核家族化のため外部に委託せざるを得なくなった面があります。家庭がないと食生活が難しかった時代から、コンビニエンスストアや外食などを利用すれば独身でも簡単に安価な食生活が送れ、生活できる社会になった時代に、ケアが外部化されているのです。家事労働を有償のものとして換算しようとする動きに、最も反発したのは専業主婦たちです。養育やケアは愛からの行為なのに、それが金銭に換算されることでプライドが傷ついたためといえます⁶⁾。

社会ではケアは労働として誰にでもできるものであり質的に低いものと考えられ、低賃金で抑えられてきた面があるといえます⁶⁾。介護職の賃金

は全産業平均の6割程度という低さでしたが、2021年政府は「福祉・介護職員処遇改善臨時特例交付金」を新設し、2022年より交付金を支給する施策がスタートしました。

介護職が人手不足のために海外からの労働者を受け入れるとき、言葉の問題でコミュニケーションも取りづらかったり、育った文化の違いからケアの提供が思うようにならないことがあるのではないかと考えられます。これからの社会をより人間的で豊かなものにするためには、社会全体がケアに對してもっと高い評価をして、賃金を支払うことが必要なのかもしれません。

ケアの真の発展のために

高度化・先進化・分業化する社会の中で、お互いがケアできるという人間的な生活を送ることができるために、ケアという行為を金銭と交換するものとしてではなく、新しい価値観が必要なのかもしれません。

わたしは、AIやロボット技術により労働時間が短くて済むようになり、給与がベーシックインカムのような形で一定の所得が保証されれば、ケアをボランティア活動としてお互いに楽しめる未来が来るのではないかと考えています⁷⁾。

加藤 眞三さんプロフィール

1980年慶應義塾大学医学部卒業。
1985年同大学大学院医学研究科修了、医学博士。1985～1988年、米国ニューヨーク市立大学マウントサイナイ医学部研究員。その後、都立広尾病院内科医長、慶應義塾大学医学部内科専任講師(消化器内科)を経て、慶應義塾大学看護医療学部教授(慢性期病態学、終末期病態学担当)。慶應義塾大学名誉教授。エムオーエー高輪クリニック院長。

■著書

『患者の力 患者学で見つけた医療の新しい姿』(春秋社 2014年)
『患者の生き方 よりよい医療と人生の「患者学」のすすめ』(春秋社 2004年)
『「いのち」をケアする医療 患者と医療者の新しい関係のあり方』(春秋社 2025年)

4) ウォルデマール・キッペス『スピリチュアルケア 病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア』サンパウロ 2010年

5) 広井良典『ケア学 越境するケアへ』医学書院 2000年

6) 上野千鶴子『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版 2011年

7) 加藤眞三『「いのち」をケアする医療 患者と医療者の新しい関係のあり方』春秋社 2025年



『まねきねこ』デジタル配信への切り替えのお知らせ

平素より、『まねきねこ』をご愛読いただきありがとうございます。

『まねきねこ』は現在、冊子とまねきねこWEB版からお読みいただけるようになっておりますが、今後はまねきねこWEB版の掲載のみ(デジタル配信)へと切り替えることとなりました。

冊子のお届けは第66号で終了となりますが、今後もバックナンバーも含め、「まねきねこWEB版」より、記事をご覧ください。バックナンバーの閲覧、記事の検索も可能です。

冊子のお届けを楽しみにされていた読者の方にはご不便をおかけいたしますが、引き続きまねきねこWEB版からご覧いただければ幸いです。今後とも、ヘルスケア関連団体の皆さまへのより良い情報提供を目指して参りますので、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

■まねきねこWEB版

<https://www.manekineko-network.org/>



書籍のご案内



〈いのち〉をケアする医療

患者と医療者の新しい関係のあり方

『まねきねこ』で連載中の「患者の力」の筆者でもある加藤眞三さん(慶應義塾大学名誉教授)の最新書籍です。

AI時代の医療に向けて患者が学び身につけるべき力とは。患者と医療者が対等な立場で対話し最適な医療を見つけることを主張してきた著者が、AI時代を前に、①医療者や家族らと連帯する能力、②情報を得て見分ける能力、③自分の価値観を知る能力の三つを身につけ、いのちを大切にする医療のあり方を示す集大成。

著者：加藤眞三 サイズ：四六判・336ページ 発行：春秋社 価格：3,080円(税込)

イベントのご案内

第2回患者・市民大集会 ～患者・市民の声を届けよう～

日 時：2025年11月27日(木)14:00～20:00

会 場：Club eX クラブエクス (品川プリンスホテル アネックスタワー 3F)

開催形式：第1部のみ会場とZoomのハイブリッド形式

主 催：(一社)新時代戦略研究所(INES)

参 加 費：①患者さん・ご家族・患者団体・患者支援団体：無料(1部・2部参加可能)

②企業ならびに一般参加者：3,000円/人(※1部のみ参加の場合は、無料)

お問合せ：患者・市民大集会運営事務局(新時代戦略研究所(INES)内)

メール：ppcip@inesjapan.com

イベントURL：<https://partnership-pcip.jp/news/news20251010/>



■プログラム

第1部 ●トークセッション(基調講演)

●患者支援プログラム発表セッション

●患者支援助成対象者発表・表彰

休憩・会場参加者によるネットワーキング

第2部 音楽ライブイベント

まねきねこ 2025年 第66号

『まねきねこ』は、ファイザーの社会貢献活動における取り組みの一環として、ヘルスケア関連団体のネットワークづくりや活動を支援するニュースレターです。内容に関するお問合せは、ファイザー株式会社 コミュニティ・リレーション部までお願いします。



■発行
ファイザー株式会社
コミュニティ・リレーション部

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル
メール：manekineko.info@pfizer.com



MESSAGE



『まねきねこ』は、今号で第66号を迎えることができました。創刊は2004年。それ以来、全国各地に足を運び、ヘルスケア関連団体の活動や活動にかかわる多くの方々をご紹介してまいりました。今ではウェブサイトを通じて団体の情報を得ることも容易になりましたが、やはり現地で直接お話を伺うことで、『まねきねこ』ならではの視点で活動の本質に触れることができました。皆さんが地道な努力を重ねている姿を第三者の目で評価し、本当に素晴らしい活動だと感じる事が多々ありました。また、取材を通じて団体を運営されている方々のお人柄に触れられたことも、私たちにとって大きな喜びでした。そして何よりも、長きにわたり冊子をご愛読いただき、温かいご支援と励ましを賜りましたこと、心より深く感謝申し上げます。皆さまの応援があったからこそ、ここまで続けてくることができました。

この度、第66号をもちまして冊子での発行を終了し、今後は「まねきねこWEB版」にて皆さまの活動をご紹介していくこととなりました。これからも変わらぬご愛顧を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

COM14P002